動詞テ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究

— 中級以上の作文・小論文指導のために —

Quantitative Study on Relative Usage of *te*-forms and Infinitive Forms of Verbs

林　　雅子
HAYASHI Masako

キーワード

［動詞テ形］*te*-forms of verbs　・［動詞連用形］infinitive forms (ren'yoo forms) of verbs
［作文］composition

1．目的

中級以上[(1)]の作文指導，特に小論文など論述文の指導では，話し言葉においてテ形を用いるところは，書き言葉では連用形を用いるよう指導されている[(2)]。

テ形で固定化していて連用形との対立をもたないものもあるが，テ形と連用形の対立をもつとされているものでも，実際はテ形の方が多く出現するものもあり，それらを連用形に置き換えてしまうと，不自然であったり，分かりにくい文章になってしまう。

そこで，書き言葉においてもテ形の方が多く出現するものにはどのようなものがあるかを明らかにするために，学習者が実際に書く機会の多い論述文で，テ形と連用形の使用実態を調査し，テ形の方が多く出現したものを中心に考察結果を提示することを，本稿の主たる目的とする。

なお，本稿の調査・考察対象は動詞テ形と動詞連用形の肯定形に限定し，以下，それらを単に，「テ形」，「連用形」と呼ぶこととする。

2．先行研究と本研究の位置付け

話し言葉においてテ形を用いるところは，書き言葉では連用形を用いるという指導方法は，テ形は話し言葉的，連用形は書き言葉的という，両形の差異は文体的差異であるとする説に基づいていると考えられる。

しかし，従来の研究では，主に，テ形と連用形の差異は文体的差異であり機能的差異はほとんどないとする説（渡辺（1971）など）がある一方で，両形の差異は意味・機能的差異であり文体的差異はごく限られた一面のみであるとする説（新川（1989）など）があり，統一的見解は得られていない。また，意味・機能的差異と文体的差異の両方を指摘しているもの

に，鈴木（1972），寺村（1981），高橋（1987）などがあるが，両形の相互関係について計量的調査結果に基づいて明示的に提示されてはいない。

そこで，先行研究における見解の対立を明らかにするためにテ形・連用形の実態を調査し，その使用差に関して計量的調査結果を提示したのが，林（2004）である。林（2004）では，動詞テ形・連用形の語彙的意味が両形の選択に関与する可能性を配慮し，両形の使用差に関わる要因を意味・機能的差異，文章・文体的差異に絞るために，１つの動詞（「なる」）を取り上げて詳細に分析した。その結果，主節・後続節に対する意味・機能的差異と文章・文体的差異が相互に関与し合ってテ形・連用形の選択に影響を与えていることが明らかになった。つまり，意味・機能的差異が関与している以上，話し言葉でテ形のものすべてを，書き言葉で連用形に置き換えることが可能なわけではないということになる(3)。１つの動詞で得られた結果がすべての動詞でも言えるか確かめるために，全動詞に対象を広げて意味・機能的観点からの調査を行う必要があるが，その前段階として，本稿では，動詞ごとの違いが両形の使用差にどのように関与しているかを明らかにすることを試みる。

3．資料

「１．目的」で述べた理由から，資料として，日本人によって書かれた論述文の地の文を選んだ。資料の選定に当たって，個人差が出ないように，１作者１作品とした。（以下，用例の出典は，作者名で記す。）

中根千枝『タテ社会の人間関係』，会田雄次『日本人の意識構造』，今津晃『二十世紀の世界』，織田武雄『地図の歴史－日本篇』，河野友美『たべものと日本人』，金田一春彦『日本人の言語表現』，高尾一彦『近世の日本』，飛鳥井雅道『近代の潮流』，吉田寿三郎『高齢化社会』，井上忠司『まなざしの人間関係』，黒井千次『働くということ』，飯田経夫『「ゆとり」とは何か』，吉野裕子『日本人の死生観』，山田雄一『稟議と根回し』，吉岡郁夫『人体の不思議』（以上，講談社。CASTEL/Jのデータを使用させて頂いた。）

4．調査方法

まず，「３．資料」で挙げた全作品からすべてのテ形と連用形を採取し，両形の動詞リストを作り，その使用度数と比率を出した。その際，以下のものは，調査対象から外した。

a）「　」で括られた会話文や引用文中に出現したもの

b）テ形か連用形のどちらかで固定化していて対立をもたないもの

〈例：補助動詞の前項，テ形・連用形からの転成副詞・転成接続詞・転成名詞等(4)〉

動詞リストの作成に当たって，調査単位の区切り方は国立国語研究所（1962）に，同語異語判別の基準は国立国語研究所（1964）に従い，必要な場合は適宜補った。

5．考察対象語彙の選定

調査の結果，約１万4000例が得られ，テ形対連用形の比率は，63%：37%であった。両形の全体の比率自体テ形が多いので，「テ形の方が多く出現した」と判断するには，論述文全体

の両形の比率を基準値と考え，個々の動詞における両形の比率が，便宜的に基準値の2倍以上になるものを，テ形の方が多く出現したものとみなした。即ち，論述文全体の連用形の度数（Y）に対して，論述文全体のテ形の度数（X）が何倍使われているかの値（X／Y）を基準値（基準比率）とし，ある動詞iの連用形の度数（b_i）に対するテ形の度数（a_i）の割合（a_i／b_i）が，基準値（X／Y）の2倍以上であれば，その動詞は論述文において「テ形の方が多く出現した」ものとみなした。

$$(a_i / b_i) \,/\, (X / Y) \quad \geqq \quad 2$$

但し，両形の合計度数が10以上のもののみを対象とした。その結果，「テ形の方が多く出現したもの」は異なり語数43語となり，これを考察対象語彙とした（表参照）。得られた対象語彙に関して考察し，その特徴ごとに分類した結果を「6．結果」に示す。（表の見出し語の①②③は，国立国語研究所（1964）の同語異語判別一覧に挙げられている番号を指す。必要な場合には，適宜（　）の中に漢字を記した。）

6．結果

A. 連用形が一拍のもの

考察対象語彙〔1〕は連用形のときに，一拍になるものである。連用形が一拍になるものはテ形の方が多く出現することが，宮島（1982）で指摘されている。宮島（1982）は，現代雑誌を資料にした調査結果に基づいているが，論述文における調査でも，同様の結果となった。テキストでは，「していて」を「しており」にするよう指示されているが，連用形が一拍になるものについて触れられているわけではない。学習者の作文には不自然に思われる文が多く見られるので，注意を促す必要があると考えられる。

B. 文法的〈機能語〉

考察対象語彙〔2〕は，国際交流基金・財団法人日本国際教育協会 著作・編集（2002）『日本語能力試験出題基準 改訂版』で，文法的な〈機能語〉のリストに挙がっているものが多く含まれていた。それらを以下に提示する。（見出し語の立て方とその表記は『日本語能力試験出題基準』のリストに従った。）

「もつ②（～をもって），つく③（～について），めぐる（～をめぐって），よる③（～によって），ます（～にもまして），ともなう（～に伴って），かぎる（～に限って），したがう（～にしたがって），通じる（～を通じて），かわる（～にかわって），もとづく（～に基づいて），そう（～に沿って），際する（～に際して），とおす（～を通して），いたる（～に至って），くらべる（～に比べて），応じる（～に応じて），とる（～にとって），くわえる（～に加えて），つれる①（～につれて），関する（～に関して），かける①（～から～にかけて），わたる（～にわたって）」

『日本語能力試験出題基準』は，学習者の自習用教材作成の資料となっていることが多く，これらを一括りにして提示すれば，学習者の理解が得られやすいと考えられる。

表　考察対象語彙

		テ形		連用形		合計
		度数	比率	度数	比率	度数
〔1〕	いる（居）	41	1.00	0	0.00	41
	へる（経）	35	1.00	0	0.00	35
	きる（着）	10	1.00	0	0.00	10
	くる③（来）	26	0.96	1	0.04	27
	みる	108	0.89	14	0.11	122
	でる	28	0.82	6	0.18	34
〔2〕	もつ②	48	1.00	0	0.00	48
	つく③	229	0.97	7	0.03	236
	めぐる	18	0.95	1	0.05	19
	よる③	934	0.95	52	0.05	986
	ます	13	0.93	1	0.07	14
	ともなう	51	0.93	4	0.07	55
	かぎる	12	0.92	1	0.08	13
	したがう	34	0.92	3	0.08	37
	通じる	78	0.92	7	0.08	85
	かわる	31	0.91	3	0.09	34
	もとづく	46	0.90	5	0.10	51
	そう	9	0.90	1	0.10	10
	際する	9	0.90	1	0.10	10
	とおす	47	0.89	6	0.11	53
	いたる	15	0.88	2	0.12	17
	くらべる	81	0.88	11	0.12	92
	応じる	29	0.88	4	0.12	33
	とる	249	0.86	41	0.14	290
	くわえる	39	0.85	7	0.15	46
	つれる①	58	0.83	12	0.17	70
	関する	16	0.80	4	0.20	20
	かける①	55	0.79	15	0.21	70
	わたる	58	0.78	16	0.22	74
〔3〕	だまる	10	1.00	0	0.00	10
	いきる	12	1.00	0	0.00	12
	あらためる	33	0.89	4	0.11	37
	すわる	20	0.87	3	0.13	23
	ならう	11	0.85	2	0.15	13
	ならぶ	22	0.96	1	0.04	23
	むかう	65	0.96	3	0.04	68
	むける	16	0.94	1	0.06	17
	ふくめる	45	0.90	5	0.10	50
	あわせる	29	0.88	4	0.12	33
	こえる	26	0.79	7	0.21	33
	およぶ	11	0.79	3	0.21	14
	つぐ②	43	0.98	1	0.02	44
	ちがう	51	0.88	7	0.12	58

C. 付帯状態

考察対象語彙〔3〕の「だまる，いきる，あらためる，すわる，ならう」は，以下のような付帯状態を表わすものが多かった。付帯状態にテ形が多いことは，田代（2002）や中野（1997）等でも指摘されている。

- 「黙って」：「そこへ置いておきな」と言われ、むっつり黙ってそこへ薪をおろす。（金田一春彦）
- 「生きて」：むしろ、企業で働く個々の人間の内深くに生きて動く「職業意識」があるならば、公害問題への取組みも従来とは違った姿勢と方向を見出すことが出来るのではないか、と考えられるからである。（黒井千次）
- 「改めて」：枕言葉を使い、故事を重んじ、ことわざを重要視し、引用が多いことも約束事の一種といえるが、これについては章を改めてのべる。（金田一春彦）
- 「すわって」：壁際のデスクに坐って一日中新聞を読んでいる元管理職の年輩者がぼくの職場にいたことは前に書いた通りである。（黒井千次）
- 「ならって」：政権をとったケネディは、故ローズヴェルトにならって、広く各界に人材を求め、「ニュー・フロンティア」政策を計画した。（今津晃）

考察対象語彙〔3〕の「ならぶ，むかう，むける，ふくめる，あわせる，こえる，およぶ」にも，付帯状態の例が見られた。

- 「並んで」：「東京物語」では、笠智衆と東山千栄子のふんする老夫婦が、海岸の防波堤の上に並んでしゃがみこみ、同じ方向を見やりながら静かに語り合っていた……などなど。（井上忠司）
- 「向って」：たとえば、ある部署のメンバーが共同して一つの業務に取り組む時、各自の机に向って別々の仕事をしていた折には見られない特殊な雰囲気があたりに生れてくるのは間々経験するところである。（黒井千次）
- 「向けて」：彼のアラブ人の友人は、アメリカで何年も過ごしたのちでも、話しながら顔を前方に向けて歩くことができないのであった。（井上忠司）
- 「含めて」：わたしはこの人民＝民衆に、三重県で一揆をおこした農民や幸徳秋水だけでなく、福沢諭吉や夏目漱石をふくめて考えている。（飛鳥井雅道）
- 「あわせて」：そしてわたしは、まなざしないしは視線のコミュニケーション的な側面を中心にすえながら、あくまでもそこに内在する〈規範性〉と〈歴史性〉という問題に焦点をあわせて、それを追究してゆきたいと考えている。（井上忠司）
- 「こえて」：ロシア最強を誇るバルチック艦隊は、日本の同盟国たるイギリスの干渉によってスエズ運河を通ることこそできなかったが、遠くアフリカの喜望峰をこえて日本沿岸にむかっていた。（飛鳥井雅道）
- 「およんで」：屈葬は日本全土に広範囲におよんでおこなわれていた葬法で、死体を伸展させず、膝を屈ませくくるのである。（吉野裕子）

D. 機能語的なもの

考察対象語彙〔3〕の「ちがう」は「～とちがって（～とちがい）」という形で，以下のよ

うに用いられている。

●「～と違って」：日常生活という舞台では、演劇の舞台とはちがって、両者の関係は未分化である。（井上忠司）

これに関連して，渡辺（1971）では以下のように述べられている。

> 体格は父に肖て頑丈だ。
>
> などの表現における下線部「父に肖て」（中略）は，「体格が頑丈だ」（中略）という事実に対して，表現主体が下した解説内容を示すと共に，後続する解説対象を誘導する職能を託された，立派な誘導成分であると認めねばならない。（P.333）

以上の規定に先の「～とちがって」の例をあてはめると，「演劇の舞台とはちがって」は，「日常生活という舞台では、両者の関係は未分化である」という事実に対して，表現主体が下した解説内容を示しているので，「父に肖て」と同様，誘導成分とみなされてよいと考えられる。

また，考察対象語彙〔3〕の「つぐ②」は，「～について」の形で，以下のように用いられているものが多く見られた。

●「～について」：日本政府が台湾について持つことになったこの事実上の植民地・韓国をいかに重要視していたかは、明治十八年の最初の内閣総理大臣であり、憲法発布のとき枢密院議長だった伊藤を投入したことで明らかであろう。（飛鳥井雅道）

これは，「日本政府が台湾についだ」とはならず，「台湾について」は「日本政府が持つ」を詳しく説明してはいるが，「つぐ」と「持つ」の主体は同一ではない。仁田（1995）では，「付帯状態」は，「シテ節と主節の事象の主体は、同一でなければならない」と規定されており，先の例は，前後の主体が同じではないため，「付帯状態」の規定にはあてはまらないものである。

Cの付帯状態の例として挙げたものの中にも，この付帯状態の規定に該当せずに，文中で機能語的に働いていると思われるものが見られた。これらは，『日本語能力試験出題基準 改訂版』で取り上げられていなかったが，Bの文法的〈機能語〉のリストに挙がっていたものに似た機能を果していると思われる。但し，機能語とみなすか否かの厳密な規定は困難であるので，便宜的に「機能語的なもの」とした[(5)]。以下，このような機能語的表現を例文と共に挙げる。（見出し語の立て方は，先のBにならっている。）

●「～と並んで」：これが動機となり本格的な蘭学の発達がもたらされ、医学、天文学、兵学などとならんで、蘭学者によって世界地理書やその翻訳書が著わされることになった。（織田武雄）

●「～に向かって」：少なくとも、外部の世界にむかって開かれている。（井上忠司）

●「～へ向けて」：彼は、高校を卒業すると若い人々の多くが都市へ向けて流れ出て行く風潮に抗し、あえて農村に踏みとどまり、養蚕と酪農を中心にした新しい農業をはじめようと試みるグループの一員だった。（黒井千次）

●「～をふくめて」：拠出制年金、無拠出制年金をふくめて種類は多いが、支給方式の不均等性、さらには国庫の負担能力問題もあって、こんごは高負担を国民が合意しない限り、イギリスの二の舞になる可能性を十分にもっているといえる。（吉田寿三郎）

●「～（を）あわせて」：なお、新生児の卵巣には、すでに左右合わせて、約四〇万個の卵子が含まれているという。(吉岡郁夫)

●「～を越えて」：イギリスの実験社会心理学者のアージャイル（Ａｒｇｙｌｅ,M.）は，個人心理学の領域をこえて，それを対人関係の場面に適用した人として知られている。(井上忠司)

●「～に及んで」：アラブの土地が委任統治領となるに及んで、欧州諸国の支配地域は拡大さえされている。(今津晃)

但し，「向かって，向けて」など，Ｃの付帯状態と見なすべきか，Ｄの機能語的なものとみなすべきか，判断に迷うものも多く見られた。

7．まとめと今後の課題

調査・考察の結果，テ形の方が多く出現したものは，以下の通りである。

Ａ．連用形が一拍のもの
Ｂ．文法的〈機能語〉
Ｃ．付帯状態
Ｄ．機能語的なもの

今後は，主節・後続節に対する意味・機能的差異と両形の使用率との関係について，さらに調査規模を拡大して調査していきたいと考えている。

謝辞

本稿は，2002年度日本語教育学会秋季大会（高知大学）における口頭発表をもとにまとめたものであり，発表会場ではもとより，発表前や後にも，多くの先生，先輩方から御教示を賜りました。心より御礼申し上げます。

文献

アカデミック・ジャパニーズ研究会編著（2001）『大学・大学院 留学生の日本語 ②作文編』アルク pp14-19,pp.37-42
国際交流基金・財団法人日本国際教育協会著作・編集（2002）『日本語能力試験出題基準 改訂版』凡人社 pp.147-174
国立国語研究所（1962）『国立国語研究所報告 21 現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊 pp.6-14
国立国語研究所（1964）『国立国語研究所報告 25 現代雑誌九十種の用語用字』第三分冊 pp.294-330
鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房 pp.329-347
高橋太郎（1987）「動詞（その三）」『教育国語』90 むぎ書房 pp.71-90
田代ひとみ（2002）「連用中止形接続についての一分析」『東京大学留学生センター紀要』第12号 pp.41-60
寺村秀夫（1981）『日本語の文法（下）』国立国語研究所 大蔵省印刷局 pp.34-39
中野はるみ（1997）「シテ形接続と連用形接続の使用の実際―中級日本語学習指導のために―」『留学生教育』第2号 留学生教育学会編 pp.105-119
新川忠（1989）「なかどめ―動詞の第一なかどめと第二なかどめとのばあい―」『教育国語』99 むぎ書房 pp.30-42
二通信子・佐藤不二子（2003）『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク pp.6-10
仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」『複文の研究 上』くろしお出版 pp.87-126
林雅子（2002）「動詞のテ形と連用中止形の使い分けに関する実態調査―中級以上の作文・小論文指導のために―」日本語教育学会秋季大会予稿集 pp.39-44
林雅子（2004）「動詞テ形と連用形の使用差に関する計量的調査研究―新聞・小説における「なる」の用法を中心に―」『計量国語学』24巻7号 計量国語学会編 pp.325-349
宮島達夫（1982）「1拍語形の不安定性―「シ」と「シテ」」『計量国語学』13巻7号 計量国語学会編 pp.289-295
村田年（1997）「上級日本語教育の方法を探る3―話しことばとしての講義，書きことばとしての講義，その差異を考える―」『日本語と日本語教育』25 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター pp.69-101
渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房 pp.302-340

後注

（1）テ形と連用形の差異の指導は中級以上が多いので，本稿はその対象を「中級以上」とした。村田（1997）にも，「初級段階後半になって作文教育も導入されるが、『話しことば』の文字化にとどまると言え、『話しことば』と『書きことば』の差異の指導は中級段階に持ち越される」とある。

（2）アカデミック・ジャパニーズ研究会編著（2001），二通他（2003）等

（3）アカデミック・ジャパニーズ研究会編著（2001）にも，「すべて連用中止にするわけではないことに注意（第2課 解答と解説）」との注記や，「理由を表すときは，連用中止形にしない場合が多いです（第6課）」との注記がある。本稿の調査結果に該当する言及はなかったが，テキストには，紙面の都合があるので，細かな注記についてすべて載せられないのはやむを得ないことであり，本稿は，現行のテキストを批判したり，修正を求めたりするものではない。

（4）国立国語研究所（1964）で副詞・接続詞としているもの
あえて・あまり・いたって・おしなべて・および・がいして・かえって・かねて・かろうじて・きわめて・けっして・さだめて・したがって・すべて・そうじて・たいして・たとえ・だんじて・つまり・なべて・はじめ・はじめて・はたして・ひいて・まして

（5）『日本語能力試験出題基準 改訂版』にも，「『‘文法的な〈機能語〉の類’とは何か』といった明確な定義や規定を与えようという試みは，行わなかった。（これは，きちんと行おうとすると，かなり難しいことである。）」と書かれている。